

太郎の恋が実るまで…

伊東朋香（東京都 女子学院高等学校 2年生）

以前、朝食で魚の小骨が喉に刺さったことがある。常に痛いわけではないが、また次の食事の時にはチクリと存在を主張してくる。

そんな魚の小骨のように、私の心にチクリと刺さっている、小さな骨がある。きっかけは、学校での家庭科の授業だった。その日は食物分野の座学で、肉の部位や特徴の確認が終わった頃、先生は徐に一冊の絵本を開いた。そして、屠殺工場の絵を指しながら、そこで働く人々への差別について話し始めた。屠殺に関わる人が親戚にいてだけで婚約が破棄される現実が今もあると。やがて、授業はこう締めくくられた。「片やマグロの解体ショーは花形なのに、なぜ私たちはこんな差別を受けるのかという工場の方の言葉を私は忘れられません」——その時から私の心には差別という、小さな骨が刺さっている。普段は意識しないが、ヒロシマで被爆者への差別を知った時、福島出身の子どもへのいじめのニュースを聞いた時、鋭い痛みが走るのだ。

そんな中、「太郎が恋をする頃までには…」が与えた痛みは、私が差別を直視する切掛となった。江戸時代、身分制度の維持の為に賤民として人間未満に貶められた人々。彼らの子孫は、時代が変わり法律が変わっても結婚や就職等で差別され続けた。そんな被差別部落出身者の太郎は、ジャーナリストの今日子と結婚す

るも、その結婚生活を僅か半年で終えた。「この結婚は周りの大切な人を苦しめるから」と。私は「差別があったから仕方がない」とするようなの結末に反感を覚えた。一方で、娘の結婚を頑なに反対した今日子の母の主張に、納得しそうな自分もいた。娘の結婚で、まだ幼い孫や社会で活躍している子どもが生きにくくなり、何より娘自身が一番苦しむことになる——「あの子にどんなに嫌われてもよいから」と結婚に反対した母親。彼女は一目、大切な家族と守った強い女性のようにみえた。しかし実際は、彼女は差別と闘わなければならない現実から逃げただけだ。

母親だけではない。自由奔放な性格で、太郎と差別を乗り越えようとする気概のあった今日子でさえ、無意識の内に差別感情を持っていた。だからこそ、「余計な心配をかけるから」と、結婚前に家族に太郎の出身を打ち明けなかったり、太郎が危篤の母を見舞うことを拒否したりしたのでろう。

この話を読み、私もどこかに差別に同調する感情を気付かないうち持っているのではないかと不安になった。「賤民」を作り、彼らを見下し、忌み嫌っていた多くの日本人と私が違うという保証はどこにもないのだ。今はまだ、自分や身近な人のそうした一面に出会ったことはない。それは、私が私立の学校という同じような家庭環境を持つ子どももしくはいない狭い世界で生きてきたから

とも考えられる。日常生活の中では異なる価値観の友人に囲まれていると思っていたが、結局は同質の集団だ。そこには、理性で抑えられない無意識の差別が生まれる程の差異はない。

そんな狭い視野を少しでも広げようと、公正な社会づくりを学ぶセミナーに参加したことがある。そこには、世間の不条理な差別に対して強い信念を持つ人、既に何らかの行動をとっている人が集まっていた。私はそこで、偶然被爆二世の妻を持つ男性と出会った。私が様々な結婚差別について学び、その複雑さに立ち止まってしまったと話すとき彼は微笑んで言った。「私は結婚の時、何も気にならなかった。子供が生まれた時、この子は被爆三世になるのだと少し思っただけで、その時も今も結婚して幸せだったと言いつける。」と。

その言葉に勇気をもたらした私は今、やはり差別は間違っている主張したい。太郎と今日子の離婚は、誰が悪い訳でもない。誰も悪くない中で、二人が離婚せざるを得なかった世界は不条理だ。太郎は不条理を強いる側の苦しみも知った上で、「日本という国が、本当の意味での先進国になるためには、このタブー（被差別部落）を消滅させなければならない。」と言いつ、「太郎が恋をする頃までには……」という歌を歌った。今の日本には差別など気にせずに結婚し、幸せだと胸を張れる人がいる。どんな事情があるろうと、差別は間違っているとするべきだ。

世間も知らず、守るべき存在も持たない私が差別に憤ることには、無責任なかもしれない。私自身、自分の中に差別感情が潜んでいる可能性に怯え、今はまだ同質の中でぶつかり合うだけの生温い環境で甘やかされていたくなる。ならばせめて、こうして悲しい差別を知った時、痛みを覚える私でいよう。いつか広い社会で採まれた日にも、今感じている素直な怒りを忘れずにいよ

う。そうした一人一人の痛みや怒りが、先進国・日本の未来にきつと幸せを築くことになるから。そのために、あの家庭科の授業で刺さった「小さな骨」は、私の中に刺さったままでもいいから。

書名…太郎が恋をする頃までには…

著者…栗原 美和子